



一般社団法人 現代教育研究協会

会報

49

題字 榎本頼兼氏 (平成 8 年～平成 20 年 京都市長)

発行所 一般社団法人 現代教育研究協会 〒600-8216 京都市下区不門通七条ドル 東塩小路町 709 TEL:075-371-5081 印刷所 株式会社 洛陽

# 現代教育研究協会で豊かな学びを

会長 梶村健二

今年度から、協会の事務所や研修会場等が従来の「インターナショナルアカデミー」から旅館「閣」に変更になります。当協会の創立者であります森藤吉先生の子息の森清史協会顧問にはこれまでから温かいご支援をいただいでまいりましたが、このたびの件につきましても森顧問の大変なご高配のたまものでありこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。このことで協会の継続的、安定的な運営ができると考えています。今後ともよろしく願っています。



駅伝やソチオリンピック・パリリンピックからの学び 年末から京都では恒

列の駅伝や京都マラソンが開催され冬の都大路を多くのトップランナーが駆け抜けました。私もテレビで観戦したり現地でも応援して一緒に楽しませていただきました。また、正月恒例の大学箱根駅伝もテレビ観戦しましたが、そこではトップから二十分以上遅れると中継点で次のランナーにタスキを渡すことができない繰り上げスタートが何校かであり悔しい思いをしている選手の姿を見ました。

目標とするものをしっかりと出し切った選手への声援はそれにもまして大きかったように思います。失敗してもあきらめず、一瞬にすべてをかける選手の頑張りは我々が見ているものに大変大きな夢と感動を与えてくれました。また、三月七日からはパラリンピックが同じ地で開催され、多くの困難を乗り越えて夢の実現に向かって挑戦する姿に感動し生きることの大切さを学びました。

スポーツから学ぶものは、成し遂げた達成感、成就感、自己肯定感など多くのものがありますが、失敗してもそこから得るものはまさに大きいと思います。競技では、最終的に勝利を得るのはただ一人だけであり、百人中その他の九十九人はすべて負けを経験するわけですが、敗因をしっかりと冷静に分析し、今後の活動に生かして

いくことこそが大事であります。挫折をばねに次の飛躍につなげていくことを学ぶことも教育の大きな役割であります。学校教育では、個人としてはもちろん、集団の中でもそうしたことをさまざまな教育活動を通して学んでいくことになり得ます。一僕は何百戦もやっているが、ほぼ負けている。ただ、勝つことのうれしさを求め、悔しさをモチベーションにやってきた「レジェンド」と言われたジャンプの葛西紀明選手）

## 教育委員会制度の見直し

安倍内閣になって教育問題が重要課題の一つとして取り組まれ、教育委員会制度など戦後のわが国の学校教育の在り方が大きく見直されつつあります。教育委員会は、戦後、それまでの学校教育の反省の上に立って新たな教育行政組織としてすべての地方自治体に誕生したものです。教育の民主化、教育の独立性、中立性、教育の安定性、継続性を目指して、五人の教育委員で構成する教育委員会が責任を持ちつつ、そのもとにおかれた事務局の責任者としての教育長が日常の業務を行う形であります。現在、教育長は市長や知事などの首長が任命した教育委員の一人として教育委員会で選ばれることになっております。首長は議会の同意を得て教育委員を任命するが、教育行政については首長が直接執行するのではなく、あくまでも教育委員会の責任で行われています。こうしたことが、学校現場でのいじめによる子どもの自殺や学力問題など様々な面で責任の所在が不明確であるという指摘がなされるとともに、選挙で選ばれた首長が教育にかかわることができないのは不合理だという意見が出されるようになってきました。そのため教育委員会制度を見直す動きが活発化し、新聞報道等によると政府は今国会で法改正をする方向で進んでいます。その内容は、教育委員会を執行機関として残しつつ、教育長を代表教育委員として首長が任命し最終責任者とする。このこと、首長主宰の会議で教育の大綱の方針を策定するということが教育に關しての首長の権限をより明確化するというものであります。一政治的な対立が学校に持ち込まれてはならず、時々の首長・権力が学校運営に關与しないという現在の教育委員会制度の根幹は、何としても守るべき（門川市長の市会答弁）であり、政治的状況から離れて継続的な営みがされるよう制度的な保障がなされるべきであります。この見直しで教育行政の課題が少しでも改善されていくことになることを願っています。

## 「現代教育」で学びの友に

昨年度は四回の講演会と宿泊研修及び日帰り研修を実施し多くの会員の皆様にご参加いただき、ともに学習し交流を深めることができました。今年も多彩な講師陣による幅広い学びの場を用意しより一層充実したものにしていきたいと思います。一人でも多くの会員の皆様にご参加いただき学びの仲間として出会えることを願っています。

第一回講演会 平成二十五年五月十一日(土)

# 「今 子どもたちは？」 〈共育・京育〉

京都市教育委員会指導部長 柴原弘志氏



本年度最初の講演会は、京都市教育委員会指導部長の柴原弘志先生にお願いしました。先生は市内の中学校現場で社会科教員として教壇に立たれた後、京都市教育委員会の道徳・特別活動担当の指導主事、文部科学省初等中等教育局の教科調査官、国立教育政策研究所の教育課程調査官として活躍された後、京都にもどられて京都市総合教育センター副所長、下京中学校長などを歴任し、現在は教育委員会の指導部長、教育相談総合

センター所長と、京都市の教育行政の第一線で活躍されています。当日は教育に関わる多岐な内容をパワーポイントやビデオ映像も交え熱心にお話しいただきました。限られた紙面の都合上、先生の意にそぐわない点もあるかと思いますが、講演の冒頭部分を紹介し報告に代えさせていただきます。

## はじめに

今日の講演では、今、子どもたちはどういった状況にあり、今後子どもたちにどういった手だてが必要かを考えていきたいと思ひ、それを共育、京育という言葉で表した。この十年で京都市の教員の三分の一が変わり、このあと五、六年で管理職は全員入れ替わりという非常に大きな世代交代の時期を迎えている。私たちが諸先輩から受け継いできた京都市の教育を若い人たちに引き継いでいく必要がある。

る。お手元に「京都市の学校教育」という冊子を配布させてもらっているが、従前の教員向けの「指導の重点」の保護者向けのもののである。教員はこの冊子をいつも手元に置き、指導の手だてとするように一昨年からは復活させている。次第送りということである。

## 今 子どもたちは？

大津市の事件があり、今全国的に注目されているが、「いじめ」の問題は従来からある。ずっと以前に「葬式ごっこ」というのがあり、担任の先生が他の生徒と一緒になつていじめに加わり、被害生徒は最終的に遺書を残し自殺するという悲しい出来事が起こった。その後次々と事案が起こり、全国の学校がいじめをなくす取り組みをしたが、現在においても学校からいじめが無くなっているという状況にはない。国立教育政策研究所の調査では、小学校、中学校で過半数の三年間で八割の子どもたちが「いじめ」の被害もしくは

## 現代のいじめ

今のいじめと四十年前の前のいじめは大きく違う。その違いの一つは被害者と加害者がすぐ入れ替わってしまうということである。昔のいじめにはそういう流動性はあまりなかった。また今のいじめは四重構造になっている。被害者と加害者、それらをとり囲む観衆、さらにそれらを遠くから見ている傍観者という構造である。傍観者の出現比率は小学校五年から中学校三年までの日本と諸外国との調査では小学校の五年で二割から三割であるが徐々に増えていく。中学校の一、二年でピークを迎える。その後諸外国では減少していくのに、日本では厄介なことに減らずに増えていく(グラフを明示した映像も交え説明が続く)。

そしていじめの仲裁者の出現比率は年齢を増すことにどんどん減っていった。しかし他の国では一定の段階までくると減少に歯止めがかかる。しかし、日本の場合は歯止めがかからずますます仲裁者が減っていく。そのように日本のいじめは、きわめて特異な状況にあるといえる。そしていじめられている子にとって最もつらいのは、前述の観衆や傍観者の存在である。

## 自尊感情の低下

ユニセフの調査で十五歳の子供たちに孤独感や疎外感を感じることがあるかの問いに日本は

二九・八%で格段に多く、世界の他の諸国は五、六%だった。自分自身を好きであるか？という問いに、否定的(好きでない、どちらかといえば好きでない)に答えた比率のデータがありますが、東京近郊の小学校高学年では男子三三%、女子四四%、中学二年では男子五〇%、女子六〇%、高校生七八%でした。同時期のアメリカの高校生では四八%である。また、自分が価値のある人間と思うかの問いかけに、日本では六二%、三%が思わないと答え、韓国やアメリカ、中国などでは思わないと答えるのは一、二割というところでした。日本人は性格が謙虚だとしてもこの違いは大きすぎると思う。これはおぎやと生まれて以降に学習してきた結果だと思われる。日本の子どもたちは自尊感情が低いとずっといわれてきたが、そのことをしっかりと受け止めないといけない。

## 教育上の今日的課題―中教審より―

新しい教育課程が二十三年から小学校で始まり、今年が高校でスタートしている。高校の英語の授業は英語でやろうというように大きく変わっているが、中央教育審議会の答申が平成二十一年にて、それを基にして学習指導要領が作られている。中教審の答申は、子どもたちの現状を調査し、それを克服する手立てとして作られるのだが、心に関わる今日的課題として次の五つがあげられている。

- ① 生命を尊重する心の不十分さ
- ② 自尊感情の乏しさ
- ③ 基本的な生活習慣の未確立
- ④ 早寝・早起き・朝ごはん運動の必要性
- ⑤ 人間関係を形成する力の低下

子どもたちの中で、それぞれが独立して問題というのではなく、お互いに関係しあつて人間関係を形成できないでいるのが現状である。最近の子どもたちの規範意識の低さがよく問題にされるが、規範意識の高い子というのは自己肯定感、自己有用感、自己効力感というような自尊感情が高いということと相関している。そして私たちは先ほどの五つの課題をばらばらにとりあげるのではなく、トータルとして今、京都の子どもたちにどういう教育、どういう活動をしていくのかを考えることが大事なのである。

……(こうして、柴原先生のお話はいよいよ核心にはいつていきます。京都の子どもたちの実態、それに対する学校や地域の取り組みについて様々な事例をあげながら、学校や地域が今後どういう取り組みをしていかねばならないか、ひいては一人ひとりの大人が子どもたちに対して何をどうしていくのかと話が続いていきました)……

お話の後、参加者から身近な地域や学校の取り組みにも多くの質問がでて、大変熱のこもった講演を終えられた。

第二回講演会 平成二十五年七月六日(土)

「威海(ウェイハイ)で日本語を教えて」

京都府日本中国友好協会副理事長 四宮陽一氏

平成二十四年度の会員へのアンケート「講演会で取り上げる内容について」で、中国は日本の隣国であるにも関わらず私たちはあまりにも知らなさすぎるのではないかと、今の中国の人たちのもの考え方や、日本人との違い、特質についてもっと知りたいというものがあり、この講演を企画しました。

語の先生が留学生の女性で、彼女の一言で結局一年間ウェイハイというところに日本語の教師として行くようになった次第です。

講師の四宮陽一氏は、京都大学法学部をご卒業後、東京海上火災保険でのご勤務のあと平成二十年より京都府日中友好協会の副理事長をしておられる。この間平成二十二年、二十三年の一年間、中国山東省威海で日本語を教えるというご経験をされ、その時のお話を中心に堅苦しいものでなく、ざっくりばらんに話していただきました。その一端をご紹介します。

ひとつの国の文化に触れるには三年が必要と言われる中で一年でするので、よもやま話のようなことになりましたがお話をさせていただきます。私は政治については右でも左でもなくリベラルを信条としています。中国に対するいろいろな考え方がありますが、日本にいるより現地を知るということで、実際にいってみて少し考えが変わりました。庶民と言うのはどこも殆んど同じだというのが基本的な感覚です。一般の町に住んでいる人たちと日本人は殆んど変わらないが、ただ習慣が違うので習慣の違いに関する理解が重要です。中国の人はうるさい、マナーが悪いといいますが、向こうへ行ってみるとまあそんなものかなと思いと逆に向こうから日本をみるとなんと清潔で諸事誠実な国だと思えました。両国には習慣の違いがあるので、両方を見られたことは良かったと思う。

中国語は難しい

中国語ほど発音の難しい言葉はない。(ウェイハイ……威海……)という言葉の抑揚を少し変えるだけでウェイハイ……危害……という言葉になってしまうことなど中国語の母音の多さ、また方言の多さなど、白板をつかいろいろ言葉の事例をあげて説明される)行く前に中国語検定の三級に通ったので何とか通用するかなと思つて行ったら大間違いで、一割ぐらいいしかわからなかった。中国語の発音の難しさを痛感した一年でもあった。

日本語教師として赴任

二〇一〇年の初めに、「私の卒業した学校に日本語の先生としていきませんか？」と私が中国語を習っていた留学生の女性から誘われました。一度現地に行ってみて考えようということで、三月に下見に行つた。関西空港から飛行機で二時間、バスで一時間でウェイハイに着く。町の中からさらに山の中に一時間バスに乗っていったところに、私の赴任した威海方正外国語学校があります。私立の高等学校で生徒も寮生活をしている。校長がOKといえは何事もよいというふうだった。そして紹介してくれた彼女の父が校長と親しいという関係がありました。中国は人と人の世界、人脈の世界です。下見にいったときものすごく手厚い中国式の歓迎、接待を受けた。九月から一学期が始まるので是非九月にまた来てくださいということになり、一年間の日本語教師生活が始まった。

現地での暮らし

(現地での生活事情として提供された広い部屋の写真を示され、現地の飲料水の事情、食事のシステム等の話が続く。)その時の私の給与は二千五百元、日本円にして三千円ぐらいだが、部屋代、光熱費、食費が無料、物価は日本の約五分の一ということなので経済的に困るということとは、まったくなかった。

八月二十六日に着任した。その夏日本は大変暑かったが現地は大変涼しく、気温は二十五度だった。冬はマイナス十度ぐらいになる。ウェイハイという街は、史跡がないので観光コースには入っていないが、大変美しく清掃もゆきとどいている。

私は団塊の世代の末席にあたります。教育の世界とは縁がなく、ずつとサラリーマンをしていましたが、六十歳になった時、サラリーマン生活ももういいかなと繰り上げ定年をしました。その頃たまたま中国語に興味を持ち、中国語の勉強をしていて、そのときの中国

学校の一日の日程は、夏時間、秋時間、冬時間、春時間とあつて八月二十六日は夏時間であり、朝



連続で授業して二日休む。その二日に生徒は自宅に帰るというようなシステムだったので自分には結構きつかった。一つの誤算はテキストをもらえなかったことである。向こうの授業は、「みんなの日本語」というテキストを各クラスの担任が教えるというシステムであり、自分の入っている余地がなく、自分以外のネイティブならではの授業を自由に行ってほしいということだった。テキストがないのでどうしたものか、とりわけ実習生は四カ月学んで日本へ行った。彼や彼女たちの勉強に対する熱心さは大変なものだった。目的をもって勉強するということはこういうことかと知った。四か月たつと日本での生活もこれなら大丈夫とそれなりの日本語力を身につけます。その人たちにどうやって実践的な日本語を教えるか、この人たちが日本に行った時に何に困るか

なるので、これらの会話を生徒たちに役割を与えて何度も練習させた。そのほかに私がやったのは絵を描き、生徒に絵を見せ、そのあとグループに分かれて「絵の中に男の人は何人いたか。」「傘は何本あったか?」など話し合い、発表をさせた。これは何を狙ったかというところ、人は何人、傘は何本、犬は何匹というように数詞を教えるという狙いなのです。(生徒たちの教室風景の写真を見せ、中学生にしか見えない子どもたちが実は高校三年生であること、生徒たちはあどけなく、とても可愛い。というようにお話は続く)

**日本と中国**  
このあと、中国の良いところばかりでなく、日本人から見ると中国の良いところ、直してほしいところと講師の先生のお話はいよいよ佳境に入っていく。  
そして……文化・習慣の違いを**理解すれば、日中の民間交流は必ず成功する……**という講師の先生の実感されたまじめにむかってゆきます。その殆どを紙数の関係でご紹介出来ないのは申し訳ありませんが、ご講演のあとの質問も大変多く、もっといろいろな話を聞きたいという中で講演会の終了を迎えました。

画まで作られた。おどろおどろしい映画のイメージがあり、フィクションの世界と思われがちだが彼は実在の人物である。歴史記録の上での晴明は西暦九二一年に生まれ、一〇〇五年に没している。公的な記録にてくるのは四十歳以降で、八十五歳まで長生きしている。  
当時の古代国家の役所のひとつに「陰陽寮」というものがあり、晴明はその中の「天文部門」に属し、天体を観測し天文占いの研究をする「天文得業生」だった。「陰陽寮」とは天と地の間を仲介する役所で、他に怪異の占事などを行う「陰陽部門」、暦の計測・作成をする「暦部門」、時間を計って告知する「漏刻部門」があった。得業生とは優秀な学生に与えられる称号で、その時の晴明の年齢は四十歳、得業生から「博士」に昇格したのは五十二歳だったので、かなり遅咲きの人生といえる。

**第三回講演会 平成二十五年八月三十一日(土)**

**「安倍晴明と晴明神社」**

佛敎大学歴史学部敎授 斎藤 英 喜 先生

**星を観る人**

会場を旅館「銀閣」に移しての第三回講演会は、佛敎大学歴史学部斎藤敎授より「安倍晴明と晴明神社」を題したお話を伺いました。一時ほどのブームでなくとも、平安期に実在した陰陽師安倍晴明の画像は一体いかなるものだったのか? 斎藤先生は先般のNHK TVで放送されたBS歴史館「平安京の闇のヒーロー安倍晴明」にご出演され、ミネルヴァ書房の日本評伝選「安倍晴明 陰陽の達人なりの著者であり、安倍晴明研究の第一人者でもあります。当日は京都ゆかりの人物と神社のお話であり、多くの参加者の熱気の中、お話が始まりました。その冒頭の一部をご紹介します。

現代の感覚からすれば、天文の占いが国家公務員の仕事であるというのは奇妙なことと思える。しかし、晴明たちが星の動きを通じて占うのは今行われているような個人の運命ではなく、天皇や国家全体に関わることだった。それゆえ彼らの任務は国家のトップシークレットに属するものだったと言える。

**安倍晴明とは**  
西暦二〇〇〇年前後の頃、陰陽師、安倍晴明がブームとなり、映

演された「安倍晴明」という言葉が必ず必要に

の五時四十五分に起床の音楽が鳴る。何かと驚いたが、ラジオ体操をして、生徒たちは先生の指導のもとグラウンドを何周か走り、それから朝食となる。午前中に二時間、午後は四時間の授業、昼休みは二時間で昼寝の時間、午後五時に終了となる。先生はそこで解放されるが生徒たちは夜の八時、九時まで補習をする。中国の子どもたちには日本のようなクラブ活動がなく、消灯までとにかくよく勉強するという印象である。今の日本の学生たちはこんな勉強時間の長さには耐えられないだろうと思う。中国人の北部の人は背が高く南部の人は背が低い。子どもたちの趣味や娯楽は圧倒的にバスケットボールで昼休みはバスケットをして遊んでいる。

**日本語授業の工夫**  
学校は二週間のうち十二日間

で、ネイティブならではの授業を自由に行ってほしいということだった。テキストがないのでどうしたものか、とりわけ実習生は四カ月学んで日本へ行った。彼や彼女たちの勉強に対する熱心さは大変なものだった。目的をもって勉強するということはこういうことかと知った。四か月たつと日本での生活もこれなら大丈夫とそれなりの日本語力を身につけます。その人たちにどうやって実践的な日本語を教えるか、この人たちが日本に行った時に何に困るか

なるので、これらの会話を生徒たちに役割を与えて何度も練習させた。そのほかに私がやったのは絵を描き、生徒に絵を見せ、そのあとグループに分かれて「絵の中に男の人は何人いたか。」「傘は何本あったか?」など話し合い、発表をさせた。これは何を狙ったかというところ、人は何人、傘は何本、犬は何匹というように数詞を教えるという狙いなのです。(生徒たちの教室風景の写真を見せ、中学生にしか見えない子どもたちが実は高校三年生であること、生徒たちはあどけなく、とても可愛い。というようにお話は続く)

**日本と中国**  
このあと、中国の良いところばかりでなく、日本人から見ると中国の良いところ、直してほしいところと講師の先生のお話はいよいよ佳境に入っていく。  
そして……文化・習慣の違いを**理解すれば、日中の民間交流は必ず成功する……**という講師の先生の実感されたまじめにむかってゆきます。その殆どを紙数の関係でご紹介出来ないのは申し訳ありませんが、ご講演のあとの質問も大変多く、もっといろいろな話を聞きたいという中で講演会の終了を迎えました。

画まで作られた。おどろおどろしい映画のイメージがあり、フィクションの世界と思われがちだが彼は実在の人物である。歴史記録の上での晴明は西暦九二一年に生まれ、一〇〇五年に没している。公的な記録にてくるのは四十歳以降で、八十五歳まで長生きしている。  
当時の古代国家の役所のひとつに「陰陽寮」というものがあり、晴明はその中の「天文部門」に属し、天体を観測し天文占いの研究をする「天文得業生」だった。「陰陽寮」とは天と地の間を仲介する役所で、他に怪異の占事などを行う「陰陽部門」、暦の計測・作成をする「暦部門」、時間を計って告知する「漏刻部門」があった。得業生とは優秀な学生に与えられる称号で、その時の晴明の年齢は四十歳、得業生から「博士」に昇格したのは五十二歳だったので、かなり遅咲きの人生といえる。

と、古代国家は「天一」の意思を受けて運営されるという思想をもつていたからに他ならない。その思想は古代中国・前漢の儒学者、董仲舒がつくった「天人相関説」に基づいている。日食や月食は災いの象徴であり、天体の星の動きに異変があるとき、天帝が地上の支配者へ天子にくだした地上の支配がよくないというメッセージであり、逆に地上の支配者の政治が悪い方向に向かうと星の運動に影響すると考えられていた。古代では天と人は相応の関係にあった。天子は天皇は天の動きをよく把握する必要があったのである。当時は、空というものを二次元でとらえていた。二〇〇四年十一月五日の午前五時に地平線に近いところで木星と金星が重なるという、見かけ上最接近するということがあったが、二次元では星と星がぶつかるということになり、晴明が占うとすると、戦争や水害が起きるということになる。

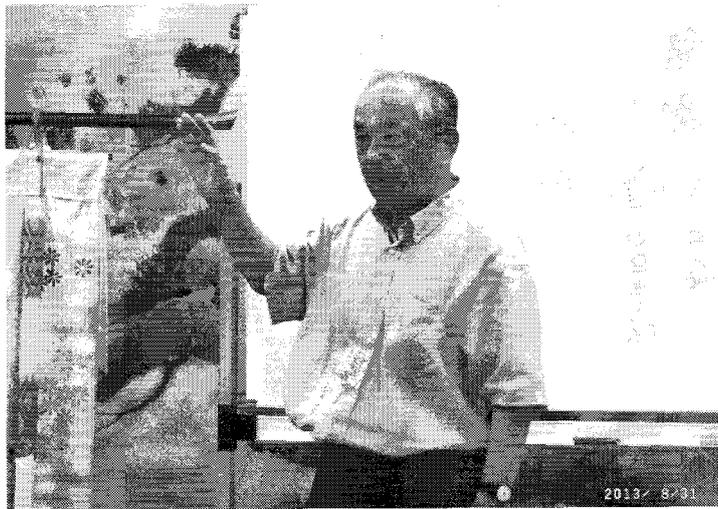
天体観測の結果が、天皇や国家に不都合があると判定されたときは、一般に公開するとパニックが起きるのでその占い結果を密封し、密かに天皇に奏上した。これを「天文密奏」と呼ぶ。晴明も何度か密奏している。そういう意味で歴史上の安倍晴明は「星を窺う人」といえる。

「陰陽道」と呼ぶわけだが、一般

に認知されている常識に「陰陽道」とは古代中国で作られ日本に輸入されたという説明がある。しかし、それは間違いである。天文占術や陰陽・五行説、天人相関説という教えは古代中国で作られたものだが、「陰陽道」という名称は、十世紀の日本の文献に初めて出てくるもので、まさしく安倍晴明の生きた時代である。「陰陽道」とは中国から伝わった教えに密教や在来の神祇信仰などをミックスさせて、日本が独自に編み出した信仰・呪術・祭祀の体系なのである。「道」とは、その専門家という意味である。

また、「陰陽師」とは官制に関わらない職業としての陰陽師と認識するのが正しいようだ。晴明が「陰陽師」として天皇の外出に際し呪術を行ったり、藤原道長の外出する日時を選定したりしている時、彼はすでに陰陽寮を退官し別の役所の官人になっていた。要するにフリーの祈祷師、占術師として活動しており、同時代の記録に「陰陽の達者なり」「道の傑出者なり」として賞賛されていた。そういう姿が「陰陽師・安倍晴明」の実像であったといえるだろう。もちろんその背後には、

「陰陽道」と呼ぶわけだが、一般



晴明自身が自らの陰陽師としての功績を宣伝してまわっていたという、したたかな一面も見出せるのだが……。

**その後の陰陽師たち**

公家中心の政治から武士の世の中になった鎌倉時代以降、陰陽師たちはどうなったのか？ 消滅したのだろうか。そんなことはない。安倍家の流れを汲む多数の陰陽師が鎌倉幕府につかえていた。鎌倉時代の記録である「吾妻鏡」によると百名を超える陰陽師の活動が見られる。また室町時代になると安倍氏は「土御門家」を名乗り、幕府の中で重んじられていった。

三代將軍の足利義満に気に入られた安倍有世は、晴明を超えて従二位という高位まで上っているほどである。

そして豊臣秀吉の時代は……、伝来したキリスト教との関連は……、江戸幕府の時代は……と、陰陽道と陰陽師と呼ばれた人たちがどういう変遷をたどっていったのか？ 先生の興味深いお話が続いていきます。

**第四回講演会 平成二十六年一月二十五日(土)**

**「日本の海洋教育について」**

総合地球環境学研究所・名誉教授 秋道 智 彌 氏

年が明けて平成二十六年を迎えた第四回講演会は、日本有数の人類学者で生態人類学、海洋民族学、民族生物学をご専門とされる、秋道智彌先生より「日本の海洋教育について―東北からの報告―」と題した講演をいただきました。

日本、中国、東南アジア、オセアニアにおいて漁撈民や天然資源管理とコモンスズに関する調査研究に従事されてきた先生は、東日本大震災で大きな被害を受ける以前から岩手県の大槌町の自然環境も研究の対象として、関わりを持たれており、今回の震災による被害や復興の状況についてもお話しいただきました。先生の多岐にわたる広範なご研究、ご著書などを踏まえて、当日は膨大な紙の資料やパワーポイントによる映像を見ながらのご講演を、限られた紙数ではとてもご紹介出来ませんので、冒頭の部分をご紹介することで報告に代えさせていただきます。

**はじめに**

日本の海洋教育というテーマで話させていただくが、一、日本における海洋教育について―海洋政策との関連で 二、海の教育における総合性について 三、海の恩

恵と災禍について―防災教育の地  
平より 四、大根メディアコモン  
ズ (MLA) の取り組みについて  
という四つの観点から話をして  
いきたい。(… MLA とはミュー  
ジウム、ライブラリー、アーカイ  
ブの頭文字とのこと…)

日本の海洋政策について

少々堅苦しい話になるが海洋教  
育は海洋政策と大きな関連があ  
る。一九八二年に国連が海洋法  
条約を批准し、日本は翌年に署  
名、十年後ブラジルのリオで地球  
の環境をどうするかというサミッ  
トがもたれた。日本の取り組みは  
遅れていて二〇〇七年にやっと海  
洋基本法ができ、同年の七月から  
施行となった。政府はその中で日  
本の海洋立国をうたっている。翌  
二〇〇八年に海洋基本計画の第一  
期の閣議決定が行われ、二〇一二  
年に第二期の閣議決定がされた。  
その間にリオでは二十年後に二回  
目のサミットも開かれている。

海洋に関して日本はかなり遅れて  
いるといえる。海洋政策の推進に  
ついても各省庁、環境省、国土交  
通省、農水省、文部科学省がそれ  
ぞれ縦割りで行ってきたので、相  
手のやっていることを知らない行  
政の矛盾、弊害が利害関係者の相  
克や現場の矛盾となつてあらわ  
れ、問題解決のためには省庁レベ  
ルでは駄目で省庁を束ねた総合的  
な取り組みが必要だということに  
なり、海洋政策にたいする総合的  
取り組みとガバナンスの視点で総

合海洋政策本部という政府直轄型  
の超党派の組織ができた。河川で  
ダムをつくったらどうなるか、海  
岸を埋め立てたらどうなるか、水  
産業はどうなる、レクリエーショ  
ンはどうなる、防災はどうする、  
津波が来たらどうする、海底の資  
源をどうする、生物多様性の保全  
は、領海と二百海里の権益問題は、  
などなどのやるが大変多いとい  
う現状があり、そのための海洋  
基本法ができ基本計画が策定され  
たわけである。今年度からその第  
二期目が始まっている。

日本の海洋教育について

振り返ってみると、四方を海に  
囲まれている我が国だが、海に関  
する知識や技術、日本人にとって  
の意味が忘れ去られようとしてい  
る。かつて多くの小中学校が取り  
組んでいた臨海学校は一九七〇年  
代以降激減した。海岸の埋め立て、  
プールの整備、海難事故に対する  
PTA からの要望等の理由があつ  
たが、結果として青少年と海の自  
然とのふれあいが少なくなり、食  
における魚離れをはじめとして、  
海離れの傾向が八〇年代、九〇年  
代と続いていく。そういつた流



れを一昨年の三・  
一一の津波が決定  
づけたのかという  
問題意識をもつて  
いる。

そこで今日の話  
になるのだが、海  
洋基本計画の中で  
は次世代を担う青  
少年の学校教育や  
社会教育の中の  
海洋教育の推進と  
いうものがある。  
学校教育において  
は、ひとつは全国  
にたくさんいる水  
産高校の学習指導  
要領を見直し、現  
場実習を通じた実  
践的な教育、実習  
があるが、小中高  
においては社会と

理科における取り組みである。社  
会と理科において海洋についての  
教育が適切に行われていないとい  
う現状認識があるので、もっと  
ちゃんとしていってほしいとい  
う。社会教育の分野では、体験活  
動やエコツアーの推進、水族  
館を含めた自然系博物館や様々な  
学会、協会を通じたアウトリーチ  
活動の推進をうたっている。学校  
教育と社会教育の両面から青少年  
の海洋に関する理解の増進を図ろ  
うということである。

京都市においては

ひるがえって京都市の学校教育  
においてはどのように考えていけ  
ばいいのか、京都市の学校教育の  
重点にある、京都市の目指す子ど  
も像と海洋教育のかかわりにつ  
いて考えてみよう。  
……と、先生のお話はつづいて  
いきます。そして具体的な海洋教  
育のプログラムを提示され、プロ  
グラムの項目ごとに図や写真を多  
く使った学習の進め方の例示へと  
すすんでいきます。一例をあげる  
と教科書『新しい社会6上』の  
「古代における諸国からの貢納品  
とその分布」という図を示し、こ  
の図から子どもたちに何を教える  
のかと問われ、古代においては西  
日本からも朝廷に鮭の貢納があ  
り、塩は全国の各地でつくられて  
いる、というようなことがポイン  
トになっていくというお話につづ  
いた。事例のそれぞれが大変辛辣  
に富んだものであり是非とも小中  
学校の多くの先生方に参考にして  
いただきたいお話の連続だった。

……このあと、領海の問題、水  
産物の消費や輸入の問題、地球温  
暖化、海洋教育の分野横断的な総  
合性、東日本大震災と津波の被害  
と復興について、防災教育、岩手  
県大槌町の自然環境保全の取り組  
み等々と先生が現在取り組まれ、  
経験されてきた具体的な出来ごと  
を交えてつづいていき、大きな拍  
手のうちに大変熱を帯びたご講演  
が終了しました。

# 現代教育研究協会の歩みをふりかえる (その四)

過去三回にわたって、昭和四十四年に京都市立塔南高等学校初代校長、洛陽工高等学校校長を歴任された森藤吉氏が呼びかけ、営利を目的としない民間の教育研究団体「京都教育研究所」を立ち上げ、その後昭和四十八年には民間の純粋な教育研究団体としてはほとんど唯一の存在であったが文部省より認可を得て、「社団法人 現代教育研究協会」として発足し、平成七年に志半ばで森会長が他界されるまでの協会の活動を駆け足で紹介してきた。

それらの活動内容は、『研究紀要』、『会報』、『日本の教育を考える』、という多くの冊子の形で刊行物としても発行されてきた。森会長も『パリの学校 最近のフランスの教育事情』、『わかりやすいフランスの学校制度』などの著書を書きおられる。そういった協会を通じての日本の教育についての各種の調査、研究、前述したノーベル賞受賞者をはじめ日本に限らず海外からも講師を招いての講演会、発表会の実施などの多岐にわたる活動を展開し

てきた森会長のご功績に対しては、昭和四十七年に京都新聞社より『教育賞』、昭和四十九年に教育功労者として『文部大臣賞』、昭和五十八年に『勲四等旭日小授賞』、平成四年にはフランス国より『パルム・アカデミック勲章』が贈られ受章されている。

そういった研究の過程で協会は、昭和五十七年以降は学校以外の教育機関としての企業内教育、家庭教育、学校外教育、学習塾と研究の対象を広げていった。そして、平成元年には、生涯学習に関する調査研究を研究目標におき、当時の文部省生涯学習局、京都府、市の担当者等を招いてのシンポジウムを開催し、平成二年の「生涯学習フェスティバル」においても記念シンポジウムを開催している。

現在の社会のニーズを先取りするような生涯学習事業への取り組みが、協会の現在の活動につながってきたと考えられるが、記録をひも解くと、昭和五十八年五月からインターナショナル・アカデミーを会場にひと月に1、2回の講演会を開催するという、熟

年ロータリー活動を二百回以上にわたって開催されている。そういった活動の最中、平成七年十一月に森藤吉会長が志半ばで他界された。その後、会長のご子息森清史氏が会長代行に就任され協会事業の継続発展に努められた。協会の活動の中心を生涯学習事業部門としての「熟年ロータリー」活動におき、成人対象の相互啓発学習の場を設定、時宜にふさわしい活動テーマを設定し、充実した講演会を実施している。また、その頃から春と秋に会員の視野を広め、かつ相互の親睦をはかる目的で、日帰りの研修旅行を実施し、それはやがて現在のようにな泊を含む研修にも変化していったことが記録に残っている。平成十三年には森清史会長代行は顧問になられ、元京都市助役・教育長であられた城守昌二氏が二代目の会長に就任された。そして、平成十七年より京都市教育委員会委員の谷口賢司氏が会長に就任されたが、急逝され、平成二十一年より現在の梶村健二会長のもと、堅実な活動を積み重ねている。

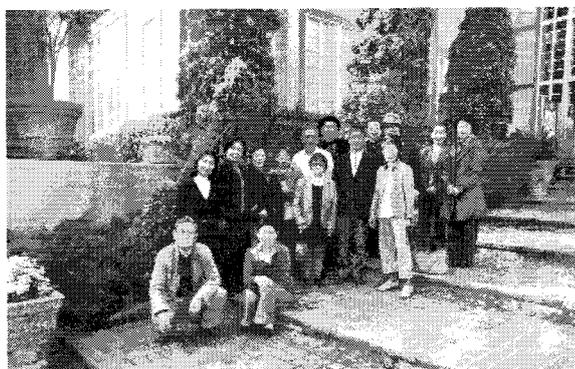
冬

## 春の研修旅行 平成二十五年三月二十四日(日)～二十五日(月)

### 名古屋、知多半島紀行―名古屋、徳川美術館・名古屋港、フラワーガーデン、知多半島、師崎・野間大坊を訪ねて―

冬の寒さが例年以上に厳しかった平成二十五年の春、桜の開花は例年になく早く、三月二十二日には京都のソメイヨシノの開花宣言がありました。そして春の宿泊研修は、その二日後、名古屋、知多半島をめぐる旅を実施いたしました。天気予報では当日は曇りとのことでしたが穏やかに晴れ、午前八時半にバスは京都駅八条口を出発しました。途中の渋滞もなく新名神、東名阪と高速道路を進み、午前十一時には名古屋市中東区の徳川美術館に到着しました。玄關周りの桜が満開の美術館は、尾張徳川家に伝えられた数々の重宝、いわゆる「大名道具」を収めたもので、国宝「源氏物語絵巻」をはじめ国宝、重要文化財、重要美術品などを多数展示、収蔵されています。当日は特別展として「尾張徳川家の雛祭り」が開催されており、その豪華さ、精緻な美しさに見る者は目を奪われました。美術館は全部で九室あり、ゆつくり鑑賞したいところですが、後の予定もあり早々に名古屋港に向かいました。東山ガーデンポर्ट店で昼食をとった後ポर्टビル展望台に上

り、名古屋港の展望を楽しみ、名古屋港の歴史をはじめとした港、船、などを紹介した海洋博物館を見学し、南極観測船「ふじ」の見学に向かいました。実際に南極観測に行っていた船の中に入り、船内の各室や、操舵室の様子は会員の皆さんも大変興味深く參觀されました。その後十五分ほどバスに乗り、名古屋港ワイルドフラワーガーデン「ブルーネット」に向かいます。ワイルドフラワーとは、



世界中の野生の草花や園芸用として取り扱われている草花の中で種子等で容易に繁殖でき、瘦せ地にも耐え美しい花を開花させるものの総称です。「ブルーボネット」では二十二もの世界各地の特徴をとらえたガーデンが様々な趣向をみせ、美しい緑や草花、水辺の輝きに身をゆだねているとまたたく間に時が過ぎ去ってゆきます。園内のサニールハウスから流れる音楽の響きをあとに、知多半島道路に向かい、先端の師崎に五時過ぎに到着し、旅館「活魚の美舟」で湯に入り、美味しいお魚や伊勢海老の刺身をいただきました。

翌朝は九時に旅館を出発、豊浜の「魚ひろば」で魚の買い物を楽しみ、美浜町野間の真言宗の寺院、大御堂寺「野間大坊」に向かいました。当地は平治の乱に敗れた源義朝の最後の地であり、境内には義朝の墓があります。野間大坊本殿に上がり参拝後、江戸初期の幕府御用絵師狩野探幽が名古屋城初代城主の徳川義直公の命により描きあげたという絹本着色義朝最期図を鑑賞し、住職より「源義朝公最後の絵解」の説明を聞きました。境内には他にも大御堂寺本堂や、義朝公御廟、鐘楼堂などがあり、三々五々拝観しました。あと、海老せんべいの里にも寄り、昼食は刈谷でフリーバイキングを楽しみ、帰路につきました。午後の五時過ぎには、参加者全員が元気に京都駅八条口に戻り、無事に春の宿泊研修を終了しました。

## 和歌山城・紅葉溪庭園とみかん狩り、紀三井寺(紅葉)を訪ねて

秋の日帰り一日研修

平成二十五年十一月十九日(火)



時代の変化を示す史跡和歌山城石垣を見ながら進んでいくと天守閣に到達し、見学前に全員で記念写真を撮りました。天守閣は昭和三十三年の再建ですが、連立式天守の構造になっており、順路に従い展示された歴史的遺物等を見ていくとまたたく間に時間が過ぎていきます。

まず西の丸の紅葉溪庭園に足を踏み入れると、そこは今まさに紅葉真っ盛りの見ごろを迎えています。江戸時代初期に作られた池泉回遊式の城郭庭園で池に浮かぶ鳶魚閣や池を跨ぐ御橋廊下などが水面にその影を映し、周囲の紅葉との取り合わせが見事なものでした。そして天守閣へと向かいます。

買物のあとは紀三井寺に向かい、まず門前の「はやし果樹園」でみかん狩りに取り組みました。案内の人からあまり大きなものより中ぐらいがよいというアドバイスを受け、みかん園でみかんをもぎとりそれぞれ採れたての味を賞味しました。そしていよいよ、本日最後の行程である紀三井寺の拝観です。西国観音霊場の第二番札所であり、正式な寺名は「紀三井山金剛宝寺護国院」ですが、山内に湧き出す三つの霊泉(井戸)から「紀三井寺」という名で親しまれてきました。正面の階段は二百三十一段あり、境内からは淡路島が遠望でき和歌山市内も一望できます。三々五々それぞれペースで石段を上り、拝観しました。

紀三井寺の参詣後、帰路に着きます。来た道に戻るのですが、途

平成二十五年秋の一日研修は、協会としては初めて和歌山県方面に足を伸ばし、和歌山城の天守、城郭の見学、西の丸にある紅葉溪庭園の散策、そしてみかん狩りを楽しんだ後、紀三井寺を拝観するという研修を企画しました。

午前八時十五分に京都駅八条口に集合し、バスは阪神高速・第二京阪道の鴨川西ICに向かいます。途中、雨にも降られましたが高速道路を乗り継いで和歌山市に入るころには青空になり、十一時には和歌山城に到着しました。そ

の大城郭は御三家の紀伊徳川家が仕上げたものですが、もともとの城地の選定は豊臣秀吉が行い、築城したのは羽柴秀長と伝えられています。

まず西の丸の紅葉溪庭園に足を踏み入れると、そこは今まさに紅葉真っ盛りの見ごろを迎えています。江戸時代初期に作られた池泉回遊式の城郭庭園で池に浮かぶ鳶魚閣や池を跨ぐ御橋廊下などが水面にその影を映し、周囲の紅葉との取り合わせが見事なものでした。そして天守閣へと向かいます。

屋近くになり、昼食と買物を予定していた和歌山マリーナシティの黒潮市場に向かいます。昼食に新鮮な海産物がいっぱい、潮彩膳をいただき、楽しみにしていた市場での買い物タイムです。「この地方だけのさんまの丸干しが以前買って美味しかった」という会員の声に皆こぞってさんまの丸干しを買ったり、買い物を満喫しました。

買物のあとは紀三井寺に向かい、まず門前の「はやし果樹園」でみかん狩りに取り組みました。案内の人からあまり大きなものより中ぐらいがよいというアドバイスを受け、みかん園でみかんをもぎとりそれぞれ採れたての味を賞味しました。そしていよいよ、本日最後の行程である紀三井寺の拝観です。西国観音霊場の第二番札所であり、正式な寺名は「紀三井山金剛宝寺護国院」ですが、山内に湧き出す三つの霊泉(井戸)から「紀三井寺」という名で親しまれてきました。正面の階段は二百三十一段あり、境内からは淡路島が遠望でき和歌山市内も一望できます。三々五々それぞれペースで石段を上り、拝観しました。

紀三井寺の参詣後、帰路に着きます。来た道に戻るのですが、途

### 編集後記

中休憩の岸和田SAではバスガイドさんの、このあたりでは「水ナス」が美味しいという言葉に、水ナスの漬け物のお土産を買いに走ったりして、午後六時には、皆元気に事故もなく、京都駅八条口に戻ってきました。

### お知らせ

平成二十六年より事務所を左記に移転します。

〒六〇〇―八二二六

京都市下京区不明門通七条

下ル東塩小路町七〇九

TEL(〇七五)三七一一五〇八一

現代教育研究協会